

2021年7月11日

大井バプテスト教会

説教題「礼拝堂が、礼拝堂になりますように！」マタイ19章13～26節

主任牧師 加藤 誠

「イエスは彼らを見つめて、『それは人間にできることではないが、神は何でもできる』と言われた」(マタイ19章26節)。

建築中の礼拝堂を囲んでいた工事用の囲いが取れて、新しい建物が間近に見えるようになりました。青空の日には白い壁がまぶしく輝いています。毎朝、幼稚園児を迎えるために門の前に立っていると、お隣のビルのリフォーム会社の会長さんが「素敵な建物ができましたね」とうれしそうに声をかけてくださり、保護者の方々から「いよいよ完成ですね。礼拝が楽しみです」という言葉をいただきます。

幼稚園の子どもたちも、新しい礼拝堂の建物が見えるようになって、お弁当前の祈りが変わってきたと担任から聞きました。それまでは津波で流された人のことやスプーンやフォークのない人のことをお祈りしていた子どもたちが「神さま、みんなの礼拝堂がもうすぐできます。あそこでたくさんの人が礼拝しますように!」、「礼拝堂をまもってください!」、「礼拝堂が礼拝堂になりますように!」とお祈りするようになったと。新しい礼拝堂のことを祈ってきたのは教会員だけではない。地域の方々が、またあけぼの幼稚園の保護者や子どもたちが、新礼拝堂の工事を見守り、その完成を待ち望んで祈ってきてくださったことを深く知らされます。

ちょうど一年前の7月5日の教会総会。コロナ禍で先の見通しがまったく立たず、前に進むべきか、立ち止まるべきか。教会員それぞれの思いを聞けば聞くほど、心が重くなり胸が張り裂けそうでした。「いったいどうすべきなのか」、大きな迷いと不安と疲れの中がありました。自分たちでは決断しきれない「小さくされた者」の私たちの姿がそこにありました。しかし、その者たちを主なる神さまは大いに憐れんでくださり、神ご自身の計画に向けて私たちの背中を押してくださったのです。

今、ほぼ完成に近づいている礼拝堂の建物を目の前にして、「私たちの力ではない。ただただ神さまがその深い憐れみにおいて大井バプテスト教会に与えてくださった礼拝堂なのだ」という思いを強くしています。

今朝の聖書は、主イエスによって小さな子どもが受け入れられ、金持ちの青年が厳しく退けられている箇所です。大切なポイントの一つ。「神さま、手を置いて祈ってください」と、神さまの前に自らの小ささ、弱さを自覚している者が受け入れられているということ。一方、「わたしは神さまの戒めをすべて守ってきました」と胸を張る青年には「あなたは自分を愛するように隣人を愛することがほんとうにできているのか。できるというなら財産をすべて売り払って貧しい人たちに施しなさい。自分がどれほど愛の足りない、信仰のない、救いがたい者であるかを学んで、もう一度出直してきなさい」と宿題を出されたのでした。人間は自分の愛や正しさで人を救うことはできない。「人にはできないが、神にはできる」。人を救うことができるのは神さまのみ。神さまの憐れみによってのみ私たちは救われる。その信仰

を主イエスはここで弟子たちや金持ちの青年に教えられたのでした。

そういう意味で、わたしは「自分たちの祈りやささげもので礼拝堂を建て上げる」という思いが砕かれて、「神さま、あなたを信じ、教会を信じる信仰を与えてください。新しい礼拝堂は、私たちの力ではなく、神さまの憐れみによって建てられることを教えて下さい」という祈りを学ばせられた一年だったと思います。

そして今、子どもたちから「礼拝堂が、礼拝堂になりますように！」という祈りを教えられているのです。「礼拝堂が、礼拝堂になりますように！」とは、なかなか深い本質をとらえた祈りだと思いませんか。礼拝堂は建物にすぎません。どんな素敵な礼拝堂が建っても、建物だけでは礼拝堂にならない。そこに「神さまに祈りをささげたい！」「一緒に賛美したい！」「聖書の御言葉が聴きたい！」という一人ひとりが集められ、神さまに向かう真の礼拝が起こされた時に、この建物は礼拝堂になるからです。「礼拝堂が、礼拝堂になる」。それは何よりも「神さまに喜ばれる礼拝堂になる」「神さまが望んでおられる礼拝をささげる礼拝堂になる」ということだと思えます。

それはどのような礼拝なのか。第一に「自分の願いだけを祈る礼拝」ではなく、「神さま、あなたの御心を教えてください！」「その御心に従う信仰を与えてください！」と祈り求める礼拝ではなかとします。今、教会の聖書日課ではエゼキエル書を読んでいます。神さまがエルサレム神殿の礼拝に深く失望し、激しく憤られている言葉を毎日示されています。ソロモン王が献堂してから 390 年間。神殿での礼拝は「偶像礼拝にすぎなかった！」と厳しく問われるのです。「偶像礼拝」とは自分の願い、自分の思いを中心に神さまを動かそうとする礼拝です。そうではなく「神さま、あなたの御心に従う信仰を与えてください」と神さまの前に私たちが小さくされていく礼拝を神さまは望んでおられるのです。

また第二にそれは「神さまが招いておられる人、誰もが参加できる礼拝」ではないかと思えます。私たちは自分では気づかないうちに「分け隔て」をし、自分の好みで自分が受け入れやすい人に近しさを感じてグループをつくり、自分と考えの合わない人、苦手な人には距離をとろうとする傾向があります。しかし礼拝の招待者は私たちではなく、神さまです。神さまは世界中のすべての人を分け隔てなく愛しておられます。新礼拝堂建築のコンセプトの一つに「心のバリアフリーが生まれる空間」とありますが、体が弱り、不自由な方も気兼ねなく集えるバリアフリーの空間であると同時に、「神さまがあなたの席を用意してくださっています。いつでもお入りください」という招きをどなたにも伝えることのできる、私たち自身の心の壁が崩されてオープンにされていきたいのです。

そして三つ目には、うれしい時、楽しい時だけ集う礼拝でなく、悲しい時も、苦しく辛い時もそこに居ていい礼拝。どんな時にも遠慮しないで参加出来て、神さまに祈り、賛美をささげることのできる礼拝。私たちのすべての日々に伴いたもう神さまにつながる礼拝。そのような礼拝を祈り求めながら、「礼拝堂が、礼拝堂になりますように！」と子どもたちと一緒に祈り続けていきたいのです。